

町の変化に対する住民の記憶とその特徴 ～東京都文京区内の横丁を対象にして～

伊藤 隆彬¹・福島 秀哉²・中井 祐³

¹非会員 東京大学工学部社会基盤学科 (〒113-8656 東京都文京区本郷7-3-1,
E-mail:ito@keikan.t.u-tokyo.ac.jp)

²正会員 東京大学大学院工学系研究科社会基盤学専攻 (〒113-8656 東京都文京区本郷7-3-1,
E-mail:fukushima@keikan.t.u-tokyo.ac.jp)

³正会員 工博 東京大学大学院工学系研究科社会基盤学専攻 (〒113-8656 東京都文京区本郷7-3-1,
E-mail:yu@keikan.t.u-tokyo.ac.jp)

住民にとっての町のイメージは、現在の町の姿そのものでなく、過去から現在にかけての時間の流れの中で連続した記憶に基づくイメージであると考えられる。この連続性を考える上で、町の中で起こる様々な変化を記憶の中でどのように処理しているかについては不明瞭な部分が多い。これを解き明かすための一助として、本研究では、町に起こる変化のうちどのようなものが住民の記憶に印象強く残っているかを、地図資料の参照および住民を対象としたヒアリングにより調査した。その結果を分析することで、住民が印象強く記憶する町の変化にはいくつかの傾向があり、それらが住民の生活体験と関係性をもっていることを示唆した。

キーワード:町の変化,連続性,記憶,生活体験

1. はじめに

町は日々変化していく存在である。町の中に建っている建物や町に住む人々、店舗や施設、またそこから発生する生活のありようは時間の流れとともに変わっていく。

一方で、町の住民が自分の暮らす町について語るとき、彼らの語る町とは現在の町のみを指すのではなく、過去から現在にかけての町に関する一連の記憶に基づいた町のイメージを指しているように思われる。このような町に関するイメージの連続性は当たり前のもものようにも感じられるが、住民にとって享受することのできないような変化が町に起こった場合、住民にとっての町のイメージはその変化を境に分断され、かつての町と現在の町との間の連続性は消失すると考えられる。町のイメージが連続性を保つための条件とは何なのだろうか。

永井ら(2011)は大分県竹田市の住民を対象にアンケート調査を行い、各世代における町の中での体験の記憶を抽出することで、世代を越えて共有される記憶の存在を見出し、その不変性が町の連続性を支える1つの要因であると述べている¹⁾。このような見方は示唆に富む反面、永井らの研究は連続性の阻害要因たる町の変化への言及が十分に為されていない。町の変化が住民の記憶の中でどのように捉えられているのかを調査することで、町イメージの連続性について新たな知見を得られると考えた。

2. 目的

以上のことを踏まえ、本研究においては、町に起こる変化のうち、住民の記憶に特に印象強く残る変化とはどのようなものなのか、また、それらの変化はどのような要因により記憶に残っているのかについて調査・考察することを目的とする。

3. 対象

(1)町の変化とは

冒頭に挙げたように、町の変化には様々なものが含意されるが、本論文においては、町の構成要素の中でも日常において特に注意を向けられやすい、住宅や店舗といった建物に着目し、それらに関する変化を追うことにした。なお、建物1件1件に対してそれぞれ詳細な調査を行うため、対象地を数十件の建物を含む範囲に限定している。

(2)対象地

対象地には、東京都文京区内の道幅約4m、長さ約100mの道路と、それに隣接する25件の建物を選定した。この道路は、大学と隣接していることもあって、戦前は学生街として賑わっており、飲酒店や遊戯場が立ち並んでいたといわれている。現在では飲食店や床屋などの店舗と住宅

とが併存するような状態で、一部には空家も見られる。

本対象地はある程度の居住者の移転や店舗の入れ替わりといった部分的な変化が繰り返されている一方で、長期にわたり在住しており、それらの変化を体験している世帯が一定数存在していることから、住民の記憶における町の変化に関して調査するのに適すと考えられた。

なお、対象地内の 25 件の建物について、現在 1 件の建物の中に複数の店舗や住宅が含まれている場合は更に細分化を行い、29 箇所分割して調査・分析を行った。

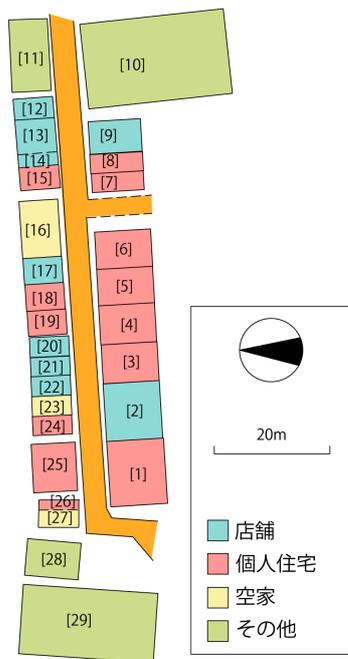


図-1 対象地概略図(2011年現在)

4. 調査方法

(1) 「客観的变化」の調査

図-1 に示したような対象地内の 29 箇所を対象に、地図資料を用いて、用途・居住者・建物の変化について調査を行った。本研究ではこの結果を被験者の主観的な記憶における変化と区別できる客観的变化と位置づけている。参照した地図資料の一覧は末尾に参考文献として記載した⁶⁻¹⁰⁾。

(2) 「記憶における変化」の調査

表-1 に示したように、対象地内の在住歴 40 年以上の住民および店舗経営者 7 名を対象とし、以下の調査を行った。

a) 地図への書き込み調査

現況の対象地周辺地図を被験者に提示し、10 分間で対象地内の覚えている限りの変化を書き込んでもらった。その際、書き始めてから 0-3 分・3-6 分・6-10 分間で書き

込む色を変えるように指示し、書き込みが早いものをより印象強く記憶されている変化と考え、変化に対する印象の強さについて段階分けを行った。

ここで書き込まれた内容はいずれの被験者も 1 箇所につき数単語で以前あった店舗やかつての居住者を書き込むのみであり、変化を記憶している要因についてはこの調査から知ることができなかった。

b) 現地踏査による調査

どのような変化を記憶しているのかについて、より詳細な情報を引き出すため、調査員が被験者と共に対象地内を歩き、建物の実物を見ながら、それらのある箇所について実体・活動問わず変わったと記憶しているところを自由に語ってもらった。

語りの分量には個人差があったが、変化がある前の状態についてどのような思い出があったかなど、変化を記憶している要因に関する発言も一部得ることができた。

c) 追加ヒアリング

a) および b) の調査では個別の箇所に限定して変化を語ってもらったが、変化が記憶される要因については十分な調査結果が得られなかった。そこで、「対象地全体の変化のイメージ」および「対象地について特に思い出深い時期」について質問し、そこから話を展開する形で変化が記憶される要因について引き出すようにヒアリングを行った。

ここでは b) で十分な発言が得られなかった被験者からも記憶の要因についてデータを得られたとともに、被験者が対象地に対して抱く感情を引き出すことができた。

表-1 被験者一覧

2011/12/25	被験者A	68歳男性	飲食業	対象地内に自宅兼経営店舗	在住歴43年
2012/12/29	被験者B	61歳男性	飲食店経営	対象地徒歩3分圏に自宅	在住歴61年 対象地内店舗勤務15年
2012/01/05	被験者C	72歳男性	無職	対象地内に自宅	在住歴53年
2012/01/25	被験者D	57歳男性	接客業	対象地内に自宅兼経営店舗	在住歴53年
2012/01/10	被験者E	61歳女性	主婦	対象地内に自宅	在住歴61年
2012/01/11	被験者F	62歳女性	主婦	対象地内に自宅	在住歴62年
2012/01/14	被験者G	45歳男性	飲食業	自宅・勤務地とも対象地内	在住歴39年

5. 分析・考察

(1) 全被験者のデータを集計した分析

表-2 は、それぞれの箇所について、地図による調査において 0-3 分で書き込みを行った人数、3-6 分で書き込みを行った人数、6-10 分で書き込みを行った人数、および地図への書き込みはしなかったが現地踏査の際に変化につい

ての言及を行った人数を集計したものである。また、これらに変化の印象が強いと判断できる順に「印象度」として1-4の点数をつけ、総計したものを「総印象度」として記した。

表-2 場所ごとの各印象度の人数と総印象度

	印象度4	印象度3	印象度2	印象度1	総印象度		印象度4	印象度3	印象度2	印象度1	総印象度
[1]	0	0	0	0	0	[16]	3	1	0	3	18
[2]	0	1	1	3	8	[17]	3	3	0	0	21
[3]	4	1	1	0	21	[18]	4	1	2	0	23
[4]	0	0	0	1	1	[19]	4	1	2	0	23
[5]	0	0	0	0	0	[20]	3	1	0	2	17
[6]	4	2	0	1	23	[21]	0	0	0	0	0
[7]	5	1	0	1	24	[22]	0	0	0	0	0
[8]	5	2	0	1	24	[23]	3	2	0	2	20
[9]	2	0	1	3	13	[24]	0	0	0	1	1
[10]	2	4	0	1	21	[25]	5	1	0	1	24
[11]	0	1	1	1	6	[26]	3	1	0	3	18
[12]	7	0	0	0	0	[27]	4	1	2	1	24
[13]	0	0	0	0	28	[28]	3	0	0	2	14
[14]	3	0	0	3	15	[29]	3	2	2	0	22
[15]	1	1	0	5	12						

印象度4：地図による調査において0-3分で書き込みを行った人数
 印象度3：地図による調査において3-6分で書き込みを行った人数
 印象度2：地図による調査において6-10分で書き込みを行った人数
 印象度1：地図への書き込みをせず、現地踏査の際に変化についての言及を行った人数

また、客観的変化の調査により明らかになったそれぞれの箇所の変化を示したものが以下の図-2である。

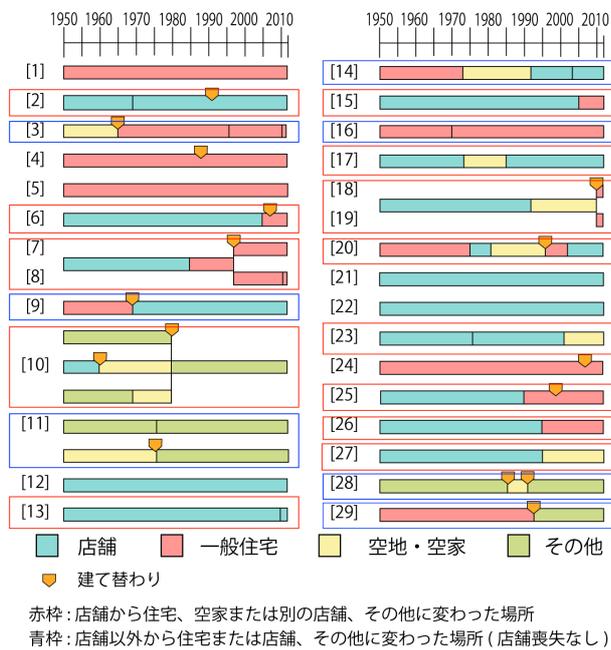


図-2 箇所ごとの客観的変化

a) 店舗の喪失の有無による比較

表-2において赤く塗られた箇所は、かつて何らかの店舗があり、現在は個人住宅や空家、もしくは別の店舗に変化した箇所である。このような箇所は15箇所あったが、その平均総印象度は20.7であった。

また、青く塗られた箇所は、店舗の喪失はないが住民の住み替えや住宅から店舗への変化といった用途・居住者の変化があった箇所である。このような箇所は7箇所あり、その平均総印象度は15.5であった。

このような総印象度の違いは、何らかの店舗が失われる変化は、住宅や空家が失われる変化よりも比較的はつきりと記憶されていることを示している。

b) 用途・居住者が変化しない建て替わり

総印象度が1、すなわち現地踏査で被験者1名のみに変化を指摘された箇所が[4]および[24]であるが、この2箇所は、実体の変化の調査によると、用途・居住者は変化しておらず、建替えがそれぞれ1回行われた箇所である。

このことから、用途・居住者が変化せず建替えが行われた場合は、変化として記憶に残りづらいことがわかる。

(2) 被験者ごとの分析

次に、被験者ごとに調査中に挙げられた変化を分析していく。ここでは、変化に対する記憶の強さについて特に顕著な傾向が見られた被験者Cおよび被験者Dのものについて紹介する。(図-3)

a) 被験者に共通する傾向

ほとんどの被験者に共通しているのは、日常生活において意識が向きやすい、自宅近辺の変化の印象度が高くなる傾向にあることである。図-3においても、自宅周辺箇所は印象度が高くなっていることが読み取れる。

一方、自宅から遠いにも関わらず印象度が高くなる箇所も見られた。これについては、b)・c)で解説する。

b) 被験者Cの特徴的な傾向

被験者Cについて、自宅から遠いにも関わらず印象度が高い箇所として[6]と[13]が挙げられる。これらの箇所には、それぞれ1960年以前より営業を続けていた雑貨屋および料理店があったが、現在はいずれも廃業している(図-5参照)。なお、本被験者は追加ヒアリングにおいて、対象地周辺において昔と比べ商店が減り生活が不便になったと述べており、その際に[6](雑貨店)の廃業を例に挙げている。また、追加ヒアリングにおいて、夜遅くまで営業している飲食店が少なくなり、夜の賑やかさが失われたことを指摘した際には、その代表例として[13](料理店)を挙げている。すなわち、これらの店舗の喪失がそれぞれの形で被験者の生活環境に知覚できる形での変化をもたらしており、そのために印象強い変化として記憶されていたと見ることができる。

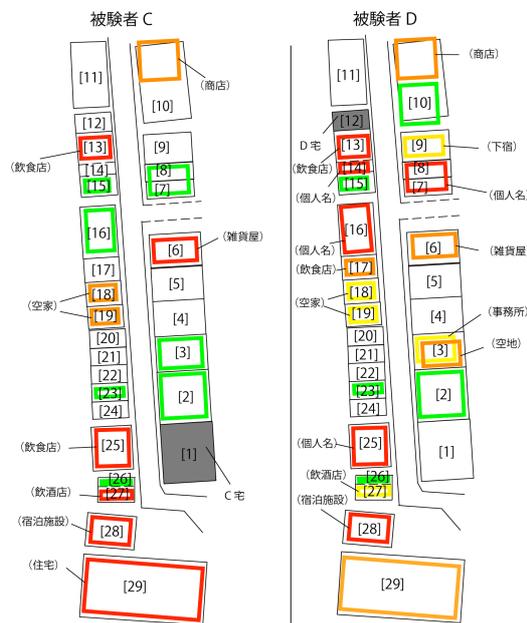
c) 被験者Dの特徴的な傾向

被験者Dについて、自宅から遠いにも関わらず印象度が高い箇所としては、[25][27][28][29]が挙げられるが、現地踏査の際に本被験者が特に深く言及したのは[25]にあった飲食店と[28]にあった飲酒店であった。発言によると、こ

の2箇所は被験者が小学生時代によく遊びに行っていた場所であり,そのような生活と結びついていた店舗が廃業したことが印象度の高い変化となっているようだ。

また,[3]の箇所について,被験者 D は空地(1960年代前半)と事務所(1960年代前半~1997年)という2つの年代での状態(図-2参照)を想起しているが,被験者 D が小学生の頃によく遊んでいたという空地をより早く想起しており,このときの状態をより印象強く記憶していると考えられる。

なお,被験者 D は補足ヒアリングにおいて対象地について特に思い出深い時期として小学生時代を挙げており,本被験者は特に印象強い生活体験が多い小学生時代の町のイメージと現在の町のイメージとの相違から,町の変化を捉える傾向があると見ることができる。



赤枠：地図を用いた調査において0-3分で書き込み
 橙枠：地図を用いた調査において3-6分で書き込み
 黄枠：地図を用いた調査において6-10分で書き込み
 緑枠：地図を用いた調査において書き込みなし、
 現地踏査において新たに想起
 (括弧内は地図への書き込み内容を
 一般表現化したもの)

図-3 被験者CおよびDの調査結果

(3) 生活体験に基づく考察

以上の分析を踏まえると,町の変化に対する記憶は生活体験,すなわち日常生活の中での知覚や活動に基づいて行われていると推察することができる。

被験者 C の分析結果に見られるように,生活自体に変化を与えるような町の変化は,印象強く記憶に残る傾向がある.このことから,日常的に利用される店舗の喪失のほうが個人住宅の喪失よりも生活に影響を与えるものであり,一方で単純な建て替わりは生活への影響が少ないことから,5(1)のような結果が得られたと考えられる。

加えて,被験者 D の分析結果から,生活体験自体の印象の強さが,変化に対する印象の強さの要因となることが読み取れる。

なお,本稿で取り上げたのは被験者 C・D のみであったが,他の被験者の個別分析結果からも,C・Dほど顕著ではないものの,印象の強い変化ほど生活体験の記憶との結びつきが強いという傾向を読み取ることができた。

6. 成果・今後の課題

本研究では,町のイメージの要因たる住民の記憶における町の変化について,以下の傾向を見いだしたことを成果として掲げる。

- ・生活に変化をもたらすような町の変化ほど,住民の記憶において印象の強い変化となる。
- ・住民にとって印象が強い生活体験と関係性が強い場所の変化は,印象が強い変化となる場合がある。

今後の課題としては,以下のことが挙げられる。

- ・別対象地で同様の調査を行い,比較分析すること。
- ・本研究で十分に扱いきれなかった文化や交流の変化についても調査を行うこと。

謝辞：本論文の作成にあたり,年末年始の忙しい合間をぬってご協力いただきました被験者の方々に,心からお礼を申し上げます。

参考文献

- 1)永井友梨,尾崎信,中井祐:住民に共有される記憶の調査に基づく町の同一性に関する考察,景観・デザイン研究講演集 第7巻,pp.172-176,2011
- 2)福田由美子:町並み復元事業における住民の記憶の具象化と共有化の意味の考察,日本建築学会中国支部研究報告集 第25巻, pp.825-828,2002
- 3)村岡大祐,千葉章一郎:都市開発と場所の記憶に関する景観復元-第二次世界大戦後の向洋地区の環境変化について-,平成17年度日本建築学会近畿支部研究報告集,pp.493-496,2005
- 4)白井利明:自己と時間-時間はなぜ流れるのか-,心理学評論 vol.51,pp.64-73,2008
- 5)佐藤浩一,越智啓太,下島裕美:自伝的記憶の心理学,北大路書房,2008
- 6)本郷五丁目赤門前町会三十周年記念誌,赤門前町会,1937
- 7)東京都全住宅地図帳,住宅協会,1957/1961
- 8)全住宅案内図帳,公共施設地図,1969
- 9)全航空住宅地図,公共施設地図,1970/1972/1974/1976-1979/1982/1987
- 10)ゼンリン住宅地図,ゼンリン,1973/1977/1978/1980/1982/1984-2011